

第40期 佐多浩一郎

千歳高校を卒業して、気がつけば三十路に突入する年になっておりました。

当時、日本のラグビーは「北の鉄人」新日鉄釜石の7連覇中で、松尾雄治、洞口孝治、瀬下和生、林敏之、本城和彦ときら星のごとくスターがおり、空前の大ブームでした。

それに引き替え千歳高校ラグビー部は2年連続公式戦一回線敗退、完封負けを続けており、田村新主将の基我々40期は“今年こそ”という気持ちで向かえた昭和58年でした。

昭和58年4月、関東大会には部員数が足りず、大会不参加となり、前途多難な船出となってしまいました。

そんな状況の中での新入生勧誘でしたが、マネージャーの澤幡、井上の努力もあり、30名近い部員と多数のマネージャーを確保する事ができ、合宿迄の下準備が整いました。

そして6月、合宿前の山のOB戦を迎えました。

瀬谷、田村の強力プロップ、縦の佐藤、横の高橋の機動力あふれるフランカー陣ハードタックルの本間がスタンド・オフを努め要所を3年で固めた田村軍団は、OB相手に善戦し、一時は押し切るかに見えたが、35期の佐藤氏に“喝”を入れられたOBに後半逆転を許し、後はズルズルと引き離されてしまいました。

しかし、OB各氏からは今年は「強い」という御墨付きを頂き、合宿に向けて、はずみがつく一戦となりました。

8月、菅平合宿。毎年恒例となった初音館での合宿でした。監督には28期の水谷禎憲氏、コーチ陣はBKに「鬼タツ」こと38期の鈴木辰夫氏、FWは「オヤジ」の39期出井直人氏でした。

合宿自体は4泊5日と短いものでしたが、走力中心の厳しい合宿でした。

この年の合宿はかなり充実しており、合宿中の試合はそこそこのいい試合が続いておりました。特に高崎高校戦では、全国クラスの高崎相手に瀬谷、田村のプロップ陣が一步も引かず、ボールを持って突進を続けましたが、BK陣の経験の差から防御網を突破され最終的には30点差となってしまいました。しかし、秋への手応えをつかんだ試合であり、チームも順調に仕上がった合宿でした。

10月、秋の大会の本戦一週間前に宿敵都立松原高校と世田谷グランドで練習試合を行う事となりました。

合宿以降驕ったわけではないですが、緊張感の抜けていた我々には、調子を取り戻すのに恰好の相手となるはずでした。

しかし、主将田村を就職の面接で欠き、間伸びしていた我々はエンジンのかかりも遅く、受けた様な試合をしてしまいました。結果は、前年の秋の大会と一緒に完封負けをくらい、本戦を向かえるには最悪の状態になっておりました。

そして、運命の学習院戦を東武東上線の上板橋駅にある城北高校グランドで向かえる事となりました。

前週松原に負けたとは言え、足を骨折していた浅川も復帰してベストメンバーで臨んだ試合であり、オール2年の学習院には負けないだろうというなめた雰囲気の中での試合でした。

しかし結果は、オール2年の学習院の早いディフェンスと正確なキック、そして機動力の前になすすべも無く、全て後手後手にまわってしまい、トライの山を築かれ、完封負けという惨めなものとなってしまいました。

3月卒業式。卒業をあやぶまれていた人間が多数おりましたが、40期全員が無事卒業する事となりました。

3年連続秋本戦完封負けの40期でしたが、バラバラの40期でしたが、下北沢の最後の宴会で歌った部歌だけは、まとまって歌った我々でした。

（ 第 40 期
同期生からのことば ）

フォーエバー。

田村悦宏

千歳ラグビー部よ 永遠に!

高橋秀明

誘われればいつでも練習に行くよ。

本間義和